第38号
1997（平成9）年11月

# くすり博物館だより

NAITO MUSEUM OF PHARMACEUTICAL SCIENCE AND INDUSTRY
内藤記念くすり博物館　〒501-61　岐阜県羽島郡川島町　Phone：058689-2101　Fax：058689-2197

## 秋の展示のご案内

江戸時代の風景

# 名所のくすり

**1997年11月1日(土)～1998年2月15日(日)**

いつの時代も旅とは、人々の楽しみのひとつにかわりありません。江戸時代後期には、貨幣経済が発達し、庶民にも“お伊勢参り”“高野山参詣”など寺社参詣の旅に出かけることができるようになりました。そして旅につきものなのが土産。薬は、軽くてかさばらないので人気があったようです。また、『名所図会』に載っている薬とあれば大変喜ばれたことでしょう。

『名所図会』とは、江戸時代後期の案内地誌で、名所の解説と絵で構成されており、現在でいうガイドブックのようなものです。最初に刊行されたのは『都名所図会(1780)』で、これが爆発的に売れました。その後『名所図会』は大流行し、全国各地の『名所図会』が刊行されました。

そもそも“名所”という言葉は『万葉集』などの歌と関わりがあり、歌枕としての“名所（などころ）”（歌に詠まれた地名）のことです。中世の時代には、優れた歌の“名所”を巡り歩き、歌枕集となる『名所記』が集成されました。そして近世に入ると、“文芸的な名所記（歌枕集）”から“地誌的要素を含む名所記（歌枕集兼ガイドブック）”へと変化しました。これには、江戸時代の旅文化が影響したと考えられています。そして、江戸時代後期には“案内地誌としての名所図会（ガイドブック）”が成立しました。

このような『名所図会』には、医薬に関する記述（伝説など）・店先の図会なども登場しており、その薬についての由来・当時の様子などについて知ることができます。そんな『名所図会』に登場する“名所のくすり”を皆様に是非観ていただきたくてこの展示を開催しました。ここに紹介した図会や資料から、江戸時代後期の人々の生活においての薬の位置づけ、またその生活の様子の一端を感じていただければ幸いに存じます。

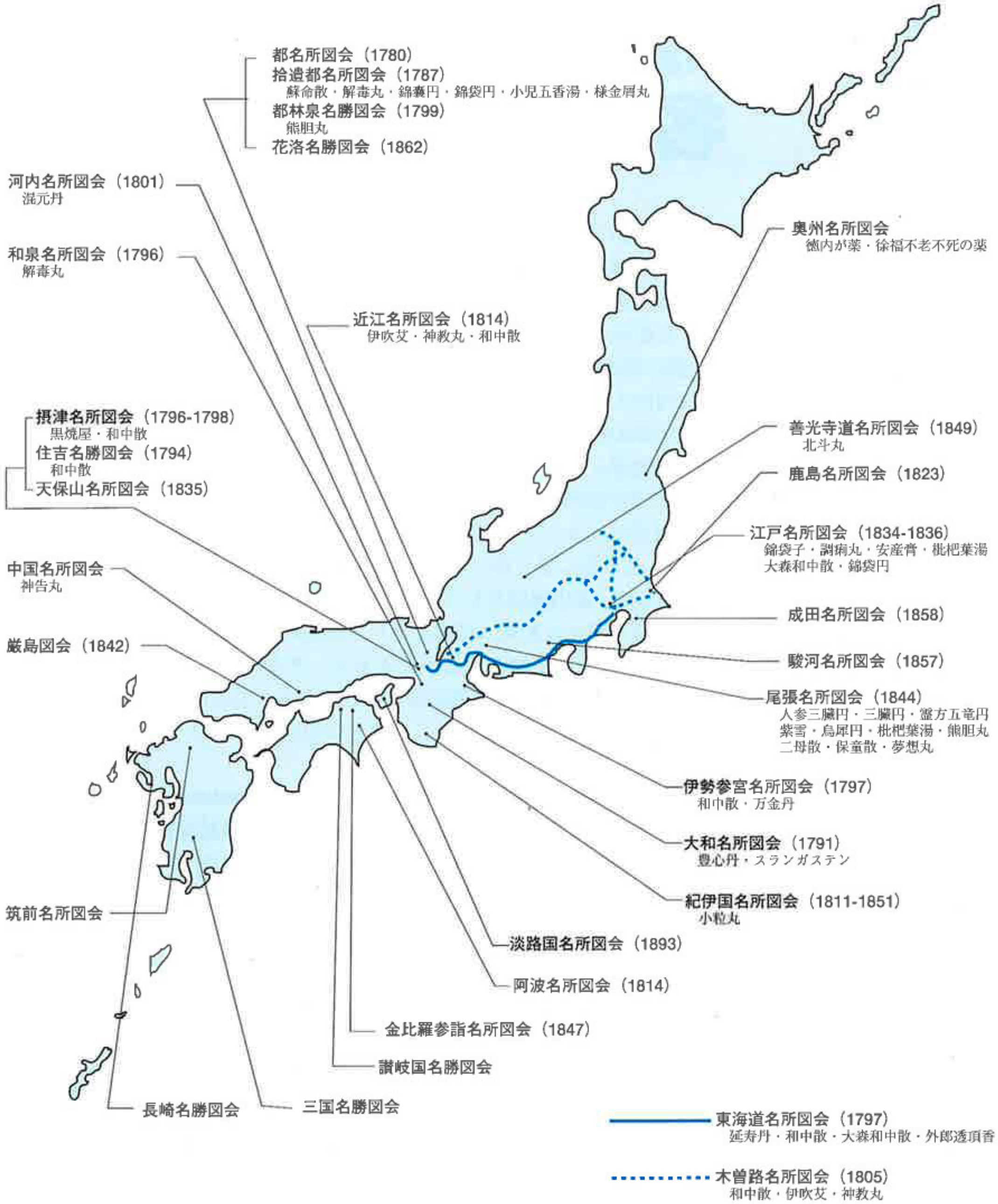
**◀東海道名所図会　外郎透頂香の店先の図**

1797（寛政9）年に刊行された『東海道名所図会』の“外郎透頂香”の店先の図です。“ういろう”というと菓子のういろうを思い浮かべますが、ここに言う“ういろう”は薬のことです。この薬の由来について、「小田原外郎透頂香は　大覚禅師来朝の時より　日本に伝り　北条氏綱ここに在城の時　八棟造の薬店を許して　弘めさせける　三絃のトウチン香のその音は千里に聞こゆ　虎屋外郎」と図中に説明しています。

この薬は、東海道の街道薬として親しまれ、歌舞伎十八番の「ういろう売り」を、二代目団十郎が演じたことから、より有名になりました。

## 各地の名所図会

『名所図会』は、江戸時代に大流行し、『都名所図会』からはじまり各地で編纂されました。下記の地図に、各地で編纂・刊行された『名所図会』とそこに登場する薬名をまとめました。

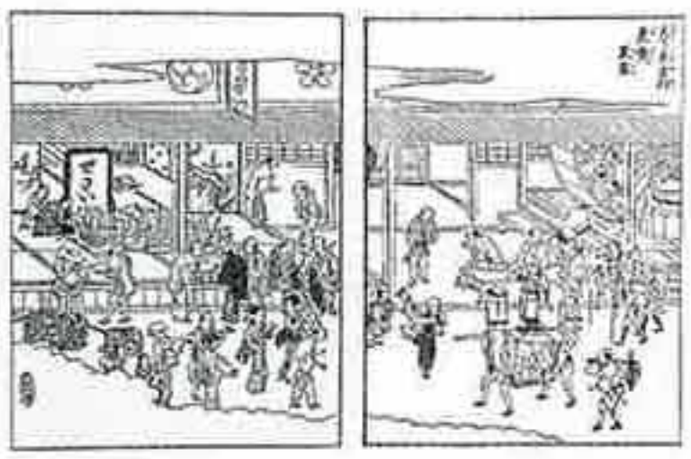


## 『名所図会』に紹介されているくすり屋

*『名所図会』にはたくさんの薬（主に薬屋の店先の図）が登場します。その一部を紹介します。*

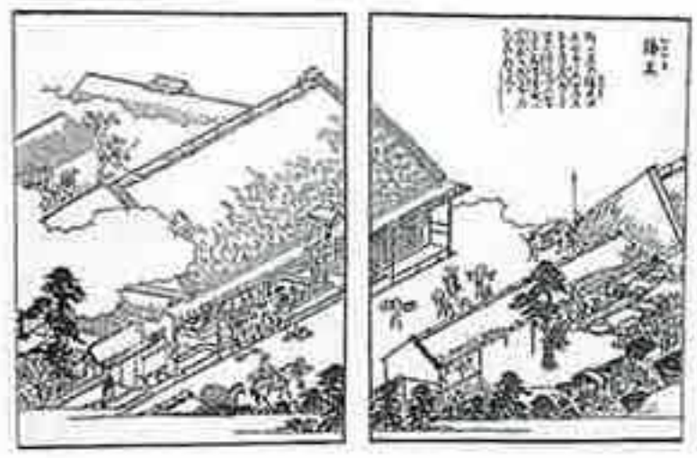
### 和中散というくすり

和中散は暑気あたり、風邪の薬で、大阪・淡路（あわじ）町、近江・梅の木、江戸・大森で販売されていました。『摂津名所図会』『東海道名所図会』など、5つの名所図会で紹介されている大変有名な薬でした。



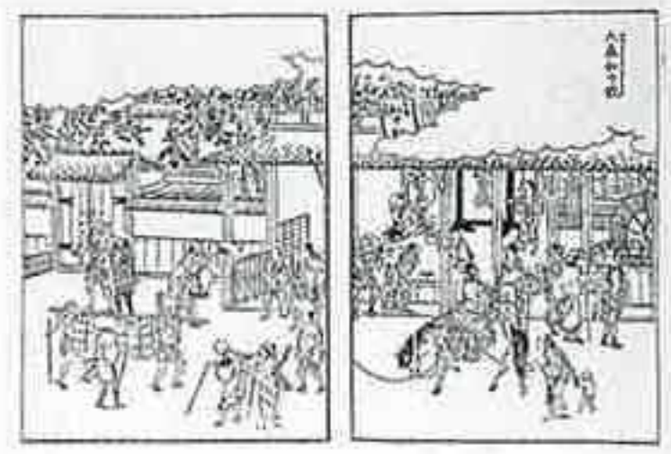
▲天下茶屋村是斉薬店（摂津名所図会）

住吉郡天下茶屋村に“ぜさい”という看板を掲げた和中散本舗の薬店がありました。この店は住吉街道に面しており、住吉参詣の人々が一休みしている様子が描かれています。



▲梅ノ木（東海道名所図会）

本文に「ここに元和の頃梅の木ありて其木蔭にて和中散を製し、旅人に賈ふ本家をぜさいといふ」とあり、“梅ノ木の和中散”といわれた由来について書かれています。

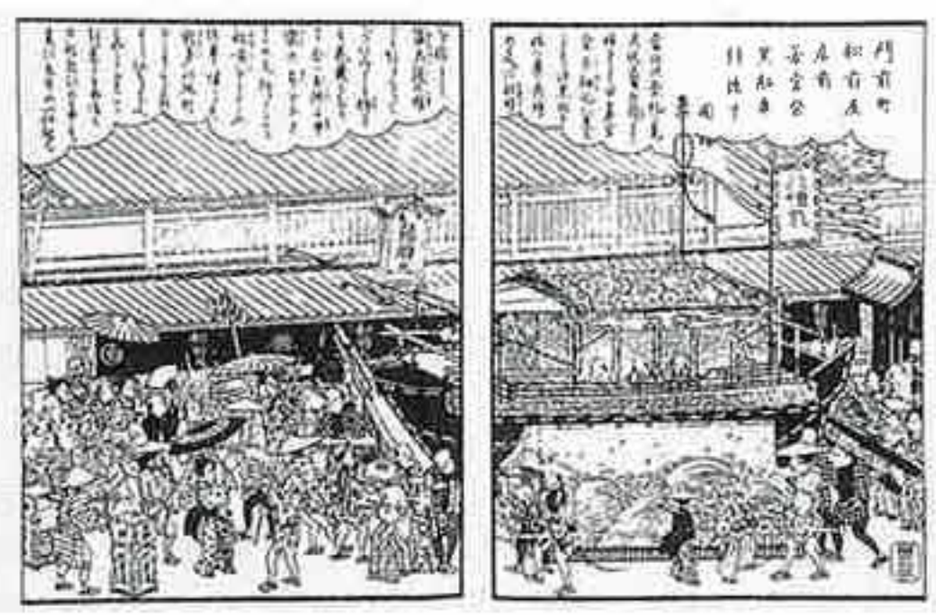


▲大森和中散（江戸名所図会）

大森にも蒲田の梅という有名な梅があったからでしょうか。菓細工などと並ぶ名物のひとつに、和中散がありました。

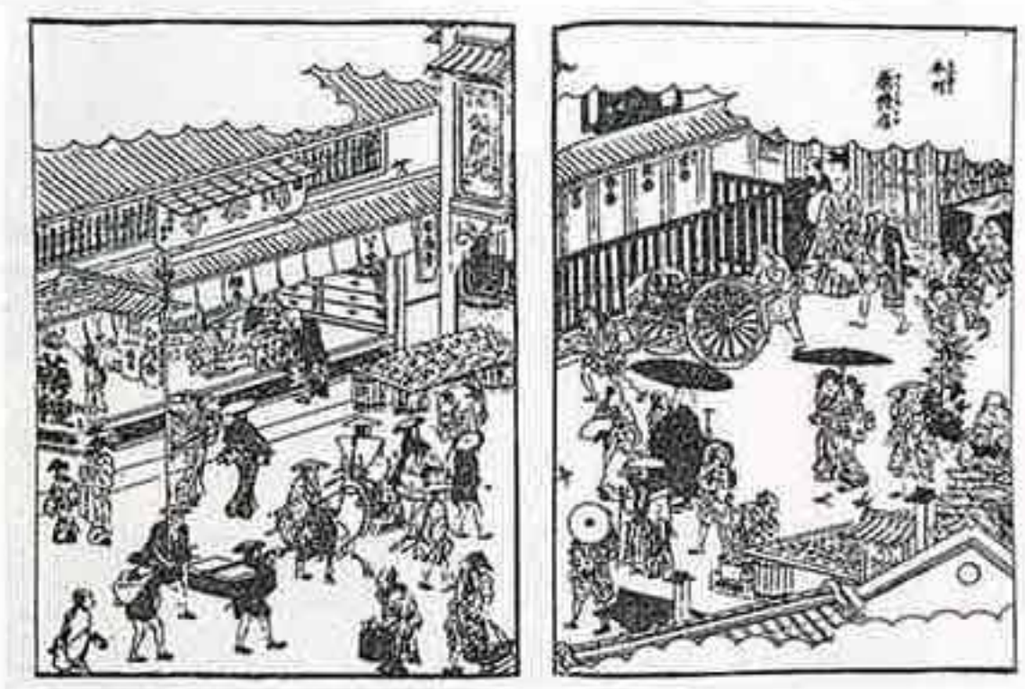
### 門前町松前屋店前（尾張名所図会）▶

尾張名所図会の門前町松前店前の絵には、熊胆丸の看板が掲げられています。熊胆丸は“気付け・毒消し”の薬で、各地で販売されていました。松前藩は、現在の北海道をも指し、江戸時代後期、大阪に北海道の名産を専門に扱う松前問屋がありました。右の図の松前店でも、北海道の物産を扱っていたのでしょうか。この店の当館収蔵の効能書の店名の欄に“おつとせいこうり”とも書かれています。



▲枇杷葉湯売り

上図の左下に枇杷葉湯売りが登場しています。枇杷葉湯は、夏の風物詩として親しまれた暑気払い・風邪の煎じ薬で、毎年五月節句より夏の間、販売されました。箱の中にはコンロ・やかん・湯呑（ゆのみ）が入っており、通行した人々に試飲させて商売をしました。本家は京都の烏丸で、箱にも丸に烏が描かれた商標となっています。



▲本町薬種店（江戸名所図会）

江戸本町三丁目には“いわしや”という、慶長10年（1605）に鰯屋市兵衛（後に市佐衛門と改名）が創業した薬種屋がありました。そこではいろいろな薬が売られていましたが、“いわしや調痢丸”というはら薬が有名でした。そのため類似品が出回ったようで、“本町三丁目　いわしや調痢丸”のマークは“㊥”でしたが、“㊀”というマーク（写真右）の“調痢丸”も販売されました。

◀紙看板「調痢丸」（江戸／36×17）

## ◀尾張医学館直伝人参三臓円店（尾張名所図会）

この図には、"尾州医学館浅井先生秘方の人参三臓円"を販売している店が描かれています。三臓とは、心臓・脾臓・腎臓のことで、この薬はそれら三臓を整える薬とされました。図の看板の調合所は"花輪秀保高"とあり、当館にもこの店の資料を収蔵しています。(写真右・下)

人参三臓円には、様々な処方があり、大阪の法橋吉野五運製のものも有名でした。

▲看板「人参三臓円」
(江戸／136×52)

◀効能書「人参三臓円」
(江戸／15.6×53.2)

## 鳥居本　神教丸の店（木曽路名所図会）▶

『木曽路名所図会』に「鳥居本…此駅の名物神教丸、俗に鳥居本赤玉ともいふ。此店多し」とあります。これは「くれなゐの花にいみじくをく露も、薬にならひ赤玉といふ」と詠まれているように、赤色の丸薬で、はら薬としてこの宿の名物でした。いくつか店があったようですが、有川家は元祖本舗を名乗る名家でした。

近江名所図会にも同じ図が掲載されています。

▲置看板「神教丸」
(江戸／210×145×78)

## ▲錦袋円店（江戸名所図会）

"錦袋円"は、"江戸　池の端　勧学屋大助"が発売した万能薬でした。図中の説明文には、勧学屋錦袋円の由来について書かれています。この店では、図のように格子の隙間から銭と引き替えに薬を売るという特異な店構えになっていました。

▲効能書「錦袋円」(江戸／15×24)

◀西大寺（大和名所図会）

江戸時代には、神社仏閣に関係する有名な薬がいくつかあります。そのひとつの“豊心丹”という薬は、西大寺で製造されていました。この薬は、仁治年間に疫病が流行した時、この寺で疫病退散祈願をした際にご神勅によって処方を得たと言われています。

▲薬袋「豊心丹」（18.5×11.3）

朝熊峠（伊勢参宮名所図会）▶

“万金丹”は、江戸時代に有名な薬でした。各地で伊勢講（伊勢参詣をするための仲間）が組織され伊勢参りが盛んとなり、軽量でかさばらない薬が、その土産として喜ばれました。本文には“朝熊岳”の万金丹について「野間茶屋といふ。この祖は、尾張野間内海より出でしなればかくいふなり。薬方は、秋田城之介実季、秘方を伝へしとぞ」と記述されており、数種あった万金丹のうち“野間の万金丹”を紹介しています。

## 名前だけ登場するくすりの資料

*『名所図会』には薬名は登場するが関連する図がないものもあります。それらの薬を紹介します。*

蘇命散（拾遺都名所図会）▶

“松林寺”の説明に「当寺むかより蘇命散を出す」という記述があります。しかし蘇命散の処方について曲直瀬道三方と福田氏方の2種類が知らています。当節では福田氏関連の資料を収蔵しています。

▶広告「蘇命散」（37.2×25.7）

混元丹（河内名所図会）▶

加賀藩の秘薬として有名な薬ですが、『河内名所図会』の“長松山万年寺”の説明に登場しています。貞観14年に疫病が流行したとき救世観音が枕もとで授けてくれた薬だという記述があります。右の写真は、“加賀福久屋　混元丹”の看板です。

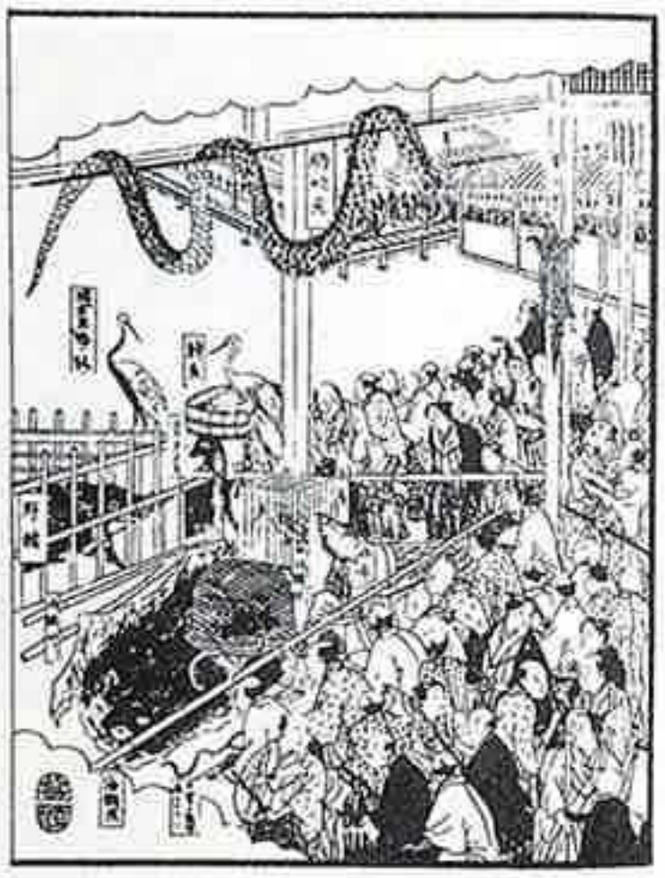
▶看板「混元丹」（明治・大正／70×25）

◀伊吹艾（木曽路名所図会）

『木曽路名所図会』の“近江　柏原”の説明に「この駅は伊吹山の麓にして、名産には伊吹艾の店多し。」とあります。右は『日本山海名物図会』（1797）の図で、「伊吹艾　伊吹山は、近江・美濃両国にかかりたる大山なり。和菓おほく出づ。中にももぐさ名物なり。古歌にもよめり。余国のよもぎより茎ふとくその長さ麻のごとし。山下の民家これをかり取りて、よくつきぬきもみぬき、もぐさとて売るなり。その白きこと雪のごとし。」と、説明しています。

## 医学関連の図会

『名所図会』には医学関連の場所の紹介もされています。



### ◀医学館薬品会（尾張名所図会）

本草学者は勉学の一手段として、度々“物産会”“薬品会”と称する薬品展覧会を催しました。本文中では「毎年六月十日にして、山海の獣虫魚、鱗介草木・玉石銅鉄などのあらゆる奇品をはじめとして、竺支西洋東夷の物産までを、一万余種集め、広く諸人にも見る事をゆるし、当日見物の貴賤老弱、隣国近在よりも湊ひて群をなす」と珍しい品を展示している薬品会がにぎわっている様子を説明しています。

薬品会に出品されたものと同種の生薬を紹介します。

▲生薬「水晶」
（11×11×6／5×8×5）

▲生薬「霊芝」（16×12）

生薬「朝鮮人参」▶
（35×9）

▲生薬「海狗腎」（オットセイの陰茎）
（21×9）

▲生薬「穿山甲」（37×16×16）

### 馬嶋明眼院（尾張名所図会）▶

天保の頃（1830—1843）江戸の土生、信州諏訪の竹内、筑前須恵の田原と共に尾張の馬嶋は日本四大眼科の1つとされていました。この馬嶋流は、明眼院（みょうげんいん）という天台宗のお寺で、清眼僧都が延文年間（1356—1360）から眼病の治療を行うようになったことが始まりです。

◀馬嶋流眼目薬師法（写本／1816（文化13））

## 薬草園から

「薬用植物園の熱帯有用植物温室の紹介」

くすり博物館附属薬用植物園の熱帯有用植物温室には、ふだん目にすることのできない植物を植えています。薬用や香辛料（スパイスなど）植物のほか、染料植物、熱帯果樹などもあり、温室内を一回りするだけでも結構、新しい発見があります。これらの植物の中には私たちの日常生活に深く関わっているものものも多く、次の５種を紹介いたします。

〈カカオ〉

種子から採れる油がカカオバターであり、この油脂は人間の体温ほどの温度で液化するため、マーガリン、口紅などの化粧品のほか、坐薬など利用されているのがわかります。

また、カカオの油からカカオバターを除いた粉末がココアで、栄養分に富む飲料です。カカオバターに砂糖と香料（バニラ等）を加えて加工したものがチョコレートです。

▲カカオの果実
径1.5cm位の大きな種子が入っている

〈サポジラ〉

サポジラの木の樹幹を傷つけると白い乳液が出ます。これを集めて煮つめたゴム質が天然チクルで、人間の体温程度の温度で適度に軟化するので、チューインガムの原料にされました。ですから、別名をチューインガムノキといいます。西洋人が南アメリカに渡ったときには、先住民であるインディオの人々はすでにこのチクルを噛んでいたといわれています。

〈チョウジ〉

チョウジ（丁字、丁香）、英語でクローブという植物はスパイスとしてよく知られ、古くから利用されているものですが、そのつぼみは精油を含んでいて強い鎮痛作用があり、また植物由来の精油としては最も強い殺菌力があるため、歯科で抜歯後の歯ぐきの殺菌に使われてきました。

〈カユプティ〉

最近は多くの日本人が海外に出掛けていますので、すでにご存じのかたも多いでしょう。香港に行きますと街中の薬局や空港の免税店など、いたるところで販売されている虎のマークの小さなビン詰の塗り薬がタイガーバーム。これは、東南アジアで人びとに根強い人気があり、打身、切り傷、筋肉痛はもちろんかぜをひいたときでも、腹痛でも身体中に塗りつけます。この薬品に配合されている精油の一種にカユプティ油があり、植物名がカユプティです。樹皮が白いため、マレー語で「白い木」の意味です。

〈アカキナノキ〉

アカキナノキはキナノキ又はキニーネといえばおわかりの方も多いはず。樹皮を煎じたものがマラリアの特効薬として知られています。

昔の人々がどのような経緯でこれらの植物を利用し始めたのか？なぜ、利用できることを知ったのかなど、いろいろ考えながら散策されてはいかがでしょうか。

くすり博物館附属薬用植物園
白井英夫

## 医療つれづれ抄10

### 真桑瓜とテッポウウリ

季節は過ぎたが、真桑瓜は西洋種のマスクメロンとは一味違った夏の果物として復活し、真正町の特産品になってきている（真正町は真桑村と弾正村が31年前に合併したとき作られた町名）。

このマクワウリは、欧米種のマスクメロンと同じアフリカ、中近東を原産地とする。ヨーロッパに伝播して発達し韓国を経てわが国に渡来したのが真桑瓜である。生薬ではこの「へた」を「瓜蔕（かてい）」といって催吐剤として使われ、神農本草経や本草綱目にのせられていた。体内に毒がたまらないようにしようというのは、江戸時代、病気の治療では主流の考え方であった。腸内に異常があれば下剤でくだし、悪い物を食べたら吐き出すのは、昭和20年頃までは、家庭でも行われていたことである。最近ではこの様なことは家庭では行われないし、瓜蔕は生薬として販売もされていない。清水藤太郎著「漢方薬物学」には「瓜蔕」は苦味催吐剤とされ、次のように書かれている。

「薬用に供するは越前に産するネズミウリと称する種類にして、瓜少し長く青黄の縦じまあり、味甚だ甘けれども、その果梗即ち蔕はすこぶる苦し、未熟果の蔕を取り乾燥して薬用とす。成分；結晶性苦味質Elaterin、作用；粘膜を刺激すること弱く、水分奪取力強し、胸中毒ありて吐かんと欲して吐かざるに用いる。量；細末として一回1～2g云々」

このElaterinがヨーロッパで薬に利用されたかどうか調べてみるとB.P.(BRITISH PHARMACOPEIA英国局方）1898に収載されていた。即ちElaterin（エラテリン）はElaterium（エラテリウム）の主成分であって、このElateriumはテッポウウリの果汁を静置して沈殿してできたものである。U.S.DISPENSATORY23版によると次のように作るとある。「テッポウウリの果実をスライスにしてふるいの上に置いておくと、無色透明なジュースが流れ出し、すぐに濁り始める。そして、数時間のうちに沈殿物を作る。それを集めて乾燥すると少し黄緑色がかった白い軽い粉になる。」これがエラテリウムである。これは強力な駆水性の下剤として、当時は特に腎炎患者の水腫の軽減に採用された。東洋と欧州で植物成分エラテリンの駆水性が催吐と下剤に利用されていたわけである。

なお、テッポウウリは地中海沿岸中東部、コーカサス等に原産する一年生草本である。果実は熟すと黄色になり、果実に触れると果梗を離れて種子を勢いよく射出する。この現象は種子の散布の例として引用される。

くすり博物館前館長　岩井鑛治郎

# TOPIX

### ◆1997年度の「企画展」終了

「企画展　丸める・煎じる―昔の製薬道具―」は、おかげさまで10月12日をもって終了いたしました。製薬道具を常設展に展示しました。

### ◆来館者80万人達成！

去る6月6日博物館来館者が80万人になりました。80万人目は、研修で来館された、三星堂製薬の石川県出身木村友則様（22才）です。「突然のことで驚いています。運命的なものを感じます。」と入社して間もない木村様はこのように語ってくれました。

### ◆開催されました夏休み親子教室

「ポマンダーを作ろう　昔の製薬道具を使ってみよう！」7月26日、27日両日26組65名の親子が参加されました。博物館や展示室や薬草園の見学、スパイスの丁字をレモンに刺すポマンダー作りをし、薬研（やげん）や石臼などを使って丸薬を作る体験をしました。

### ◆新館長へバトンタッチ

岩井鑛治郎前館長の退任にともない、平成9年10月1日付けで、三宅康夫（やすお）新館長が就任いたしました。

三宅館長はエーザイ㈱で製剤研究に従事し美里工場長、生産技術研究所所長を経てきました。就任にあたっては、「今までとはジャンルの異なる分野ですが、一般の見学者に喜んで頂き、かつ専門家・研究者には満足して頂けるような、よい博物館運営を目指したいと思っております。これからもよろしくお願い申し上げます。」と抱負を語っています。

### ◆こんな資料を貸し出しました

◇銅製らんびき
　ＩＮＡＸギャラリーへ
　『道具の謎とき展　What is this?』
　　9／1～11／24

◇華岡青州手術道具
　大分市歴史資料館へ
　『森羅万象に遊ぶ～
　　江戸の科学と好奇心～』
　　10／24～11／24

◇薬研、石臼、中国医学伝来パネル
　大阪家庭薬親和会へ
　『美と健康の出会い』
　　10／15～10／16

### ◆～新収蔵資料～

おもしろい形の看板を紹介します。

◇ウルユス看板

大阪　松尾健寿堂　48×65㎝

◇神寿散

京都　石田勝秀謹製　57×41㎝

◇太田胃散

東京　大田信義製　53×101×32㎝
水野恵三様ご寄贈

### 資料・図書のご寄託・ご寄贈者　ご芳名

有川紀久　五十嵐光敏　梅田俊彦
大江　上　大滝武雄　奥沢康正
川原哲夫　小野眞孝　国木田誠一
小森輝夫　後藤二三郎　芝　哲夫
篠田達明　瀬野敦子　佐久間温巳
谷本光保　能勢　彰　長門谷洋治
藤井良知　水野恵三　宮崎　惇
吉村輝久雄　米田該典　（敬称略）
ありがとうございました。

### ～お詫び～

『くすり博物館だより』37号にて間違いがございました。深くお詫び申し上げます。下記のように訂正させていただきます。
（誤）り物→（正）り博物（P.3右下）

館長　三宅康夫　学芸員　稲垣裕美、朝倉加代　学芸員・司書　野尻佳与子、伊藤恭子（編集担当）　庶務　市橋由志子、森田麻起子　説明員　小島敦子　薬用植物園　白井英夫、栗本省三、松尾三雄　顧問　青木允夫　アドバイザー　逸見誠三郎
内藤記念くすり博物館　開館／9：00～16：00　休館／月曜日・年末年始［12／28～1／8］